



薬谷 礼子

Yakutani Reiko

イブ
ちゃん
の
魔法まほう

「お母さん。あのお人形さわっていい？」

「すみません。その水色の服を着た赤ちゃんのお人形、見せていただけますか？」

お母さんがお願いすると、オモチャ売り場の店員さんが、棚にすわっている人形をそつとだきあげて、おろしてくれました。そして、

「どうぞ」

と言つて、真央ちゃんにわたしてくれました。

真央ちゃんのお母さんは、中学校の先生をしていて、今日は早く帰つて来たので、いっしよに、上町スーパーに買い物に来ていたのです。

その人形は、頭から足の先までの、つなぎの服を着ていて、服の色は、真央ちゃんの大好きな水色です。

本物の赤ちゃんみたいに、ふつくらした手足、ほほはピンク色、目がつても大きくてねかせると、長いまつげを下におろして目をつむります。小さな口元は、今にもかわいい声で、真央ちゃんに話しかけそうです。おすわりもできます。だくと、真央ちゃんの胸にすつぽり入る大きさです。

真央ちゃんは、（私の家にこんなかわいい赤ちゃんがいたらいいな、私の妹にしたいな）そんなことを思っていると、その人形がほしくてたまらなくなってきました。

でも、オモチャを買ってもらえるのは、たんじょうびだけなので、お母さんに「買って」と言えなくて、がまんしていました。

真央まおちゃんは、その日から毎日、人形に会いたくて、学校から帰ったら、かばんをげんかんにおいたままで、一人で上町スーうえまちパーに走って行きました。

店員さんは、そんな真央ちゃんに、いつも、大好きな人形をだかせてくれました。

真央ちゃんは、良いことを思いつきました。

そう、もうじきクリスマスなんです。

(サンタさんにお願いしよう)

真央ちゃんは、さっそく手紙を書きました。

——サンタクロースさま。

とつても寒くなりました。お元気ですか。

私は今年ことし、小学三年生になりました。

今年も、もうすぐクリスマスがやってきます。クリスマスのプレゼント

トには、上町スーパーの二階にかいの、オモチャ売り場に売っている、あの

水色の服を着たお人形がほしいです。

よろしくおねがいます。

真央より――

手紙をビニールの袋に入れて、テラスのレモンの木に、くくりつけました。

真央ちゃんは、字が書けるようになった一年生の時から、クリスマスが近づいたら、（サ
ンタさん何時いつ来てくれるかな？ 早く手紙に気がついてくれたらいいな）と思いながら、
毎年、こうしてくくりつけているのです。

テラスから見える向かいの家の、古い大きなイチヨウの木が金色に色づいて、シャンデ
リアのように輝かがやいて、冷たい風にゆれていました。

次の朝、真央ちゃんが目をさまして、テラスに出ると、レモンの木には、真央ちゃんの
手紙がなくて、サンタさんから手紙が届とどいていました。

「お母さんお母さん！ 昨日、真央ちゃんがお手紙出したら、もう、サンタさん、取りに
来てくれたよ。お返事がほら！」

真央ちゃんが、キツチンにかけこんできました。

『真央ちゃんへ。』

私は冬が大好きなので、元気ですよ。日本のお友だちに、クリスマスイブの日に、ブレ

ゼントをとどけなくてはならないので、今は、そのじゅんびでおおわらわです。真央ちゃん
のほしいプレゼント、わかったよ。楽しみにまっけてください。サンタクロスより」
て書いてる」

「よかったね。クリスマスが楽しみね。今夜は、クリスマスツリーをかざりましょうね」

次の日、真央ちゃんは、学校から帰ったらすぐ、庭のそこから、クリスマスツリーを
だしてきました。

去年は、真央ちゃんの背より少し高かったツリーですが、今年ことしは、大きくなった真央ちゃん
の身長と、同じくらいの高さになっていました。

小さなサンタさんや、とないがひくソリや、大小の星や、赤と金色と銀色の丸い玉、
そして、プレゼントのリボンがついた小さな箱はこなどを、一つ一つかざっていききました。

小さなかざり電球でんきゅうがついたコードを、ツリーにかけてから、雪が積つもったように、まっ
白なわたを、ツリーのあちこちにくつつけて、出来上がりです。

コードのはしをコンセントに差し込むと、星が、空から一度におりてきたように、ツリー
が、まぶしい光につつまれました。

「わあ！ きれいな！ ランランランランラン鈴がーなる」

真央ちゃんは、ツリーのまわりを、スキップしながら歌いました。

そして、ツリーのでっぺんの大きな星のそばに、サンタさんからの手紙をつるしました。

待ちに待った十二月二十四日、クリスマスイブの日がやってきました。

ふろから上がってから、パジャマにきがえて、ふとんに入った真央ちゃんでしたが、なかなかねむれません。

そつとふとんから出て、窓の外をのぞいてみました。

雪が音もなく降^ふって、あたりを明るく^まらしてしまいました。

(きつと、サンタさんをむかえる雪なんだ)

「窓を開けていたらかぜをひきますよ。早くおやすみなさい。真央ちゃんがおきていたら、サンタさん来ないかもしれないわよ」

お母さんにそう言われて、

(そうだ、サンタさんは、ねむっている間に来るんだわ)

真央ちゃんは、急^{いそ}いで窓をしめて、ふとんに入りました。

サンタさんにたのんだ、あの水色の服を着た人形のことを思って、うつらうつらしている内に、ねむってしまいました。

真央まおちゃんは、朝、目をさますと、パジャマのままテラスにとんでいきました。

テラスは、雪で真っ白におおわれて、朝日あさひをまぶしくはね返かえしていました。

雪が積つもつていないひさしの下には、真っ赤なりボンで結むすばれたピンク色の箱が、真央ちゃんをまつていました。

「わーい。サンタさんのプレゼント！」

真央ちゃんは、その箱を、朝ごはんのしたくをしているお母さんに見せにいきました。

「開けていい？」

お母さんが、「いいよ」と言う間もなく、もうりボンをほどいている真央ちゃんでした。中には、なんと、サンタさんをお願いしていたあの人形が入っていました。

「お母さん！ サンタさんが、あの上町うえまちスパーで見た水色の服を着た赤ちゃんの人形と同じ人形を、下さったよ。ほら！ ほら見て！ 見て！」

「よかったね」

お母さんは、真央ちゃんよろこぶ顔を見て、やさしくほほえみました。

真央ちゃんは、クリスマススイブにサンタさんからいただいた人形なので、「イブ」という名前をつけました。

人形のくつ下のうらがわに、細い黒のマジックペンで「イブ」と、小さく書きました。

真央ちゃんは、さっそく、サンタさんに手紙を書きました。

——サンタクロースさま。

お人形ありがとうございました。大切にします。私の妹にします。

名前をイブちゃんにしました。

真央より——

そして、レモンの木にくくりつけました。

真央ちゃんはその日から、イブちゃんが待っているので、学校が終わったら急いで家に帰ってきます。

お母さんが仕事しごとから帰ってくるまで、イブちゃんと話したり、だいてあげたり、おぶつたり、さんぼしたり、絵本を読んであげたり、こもりうたを歌って、ねかせたりして、あそびました。

クリスマスがすぎて、新しい年が始まって、春休みが近づいたある日の夜のことです。
「ごめんください。夜遅よるおそくごめんください」

「どなたかしら？ はい」

お母さんがげんかんに出てみると、小さな女の子の手をひいて、おばさんが立っていました。

「まあ、金田奈美さんのお母さん。どうされたのですか？ 奈美さんの妹さん？ よくきたね。お名前なんていうの？」

女の子は、ちよつとはずかしそうに、

「ゆりちゃん」

と、小さな声で言いました。

「先日三歳さんじゅっさいになったばかりなんですよ」

「そうなんですか。どうぞお上がり下さい」

お母さんがそう言うと、おばさんは、なんだかしんみりような顔をして、ゆりちゃんといっしよに、ざしきにあがってきました。

おばさんは、真央まおちゃんのおかあさんが教えている、受け持ちのクラスの生徒の、お母さんでした。

二人は、長い間むつかしそうな話をしていました。

そのうちに、おばさんの横にすわって、おとなしくしていたゆりちゃんが、立ち上がって、

「お母ちゃんもう帰ろうよ。ねえ！」

とおばさんの手をひっぱりました。

「ゆりちゃん。もう少し話があるからまってね」

「いやっ！ 帰る！」

ねむそうに目をこすりながら、半分泣きだしそうになりました。

「おりこうだから、もうちよつとまって」

「いやあー」

ゆりちゃんが泣き出したので、

「真央ちゃん！ ちよつと！」

お母さんが、となりの部屋であそんでいた真央ちゃんを呼びました。

「はい。なにに？」

真央ちゃんが、イブちゃんをつれて、お母さんの所に行くと、

「そのお人形、かしてあげて」

「えっ！」

「ゆりちゃんがたいくつしているみたいなの。オモチャもないし」

「はい」